2009年 夏号

第66号

僧伽編集委員会

〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL (076) 241－5219
題字　本多　千翠

僧　伽

安楽浄土は、もろもろの往生の者（ひと）、不浄の色（しき）なし、不浄の心なし、畢竟じてみな清浄平等無為法身を得しむ。

『教行信証』

『教行信証』親鸞聖人が残された書物の中で、代表作とされるもの。

生きることのかたち

徳法寺　杉谷　浄

上の写真は、南米にいるラクダの仲間でビクーニャという動物です。南米にはこの他にグアナコ、リャマ、アルパカという同じラクダの仲間がいます。アルパカは去年テレビのコマーシャルで人気者になりましたから御存じの方も多いと思います。

アルパカは羊のように毛を取るためにビクーニャを家畜化したものです。ですから野生のアルパカはいませんし、ビクーニャを家畜として飼っていることもありません。同じようにグアナコを家畜化したのがリャマです。リャマは毛を取るためというよりは、もっぱら荷物を運ぶために飼われています。ビクーニャやグアナコの毛はアルパカのように長くはありませんが、とても軽くて上質なため、ビクーニャの毛で作られたコートは数百万円もします。それでもビクーニャを飼育できないのは、とても神経質で、決して人になつかないからです。

多くの野生生物がそうであるようにビクーニャやグアナコも今では保護されながら生きています。ただ人間とは無関係とはいえないまでも、一定の距離を保ちながら自分たちのルールで生きていくかたちを選んでいます。一方で、アルパカやリャマのように、人間に毛や労働を提供しながら、人間の決めたルールに従って生きてくのも一つのかたちなのです。このことはタンポポと稲のような植物にもいえますし、私たち人間の生き方にもいえることです。どちらが優れているということではなく、どちらも等しく尊いものとして私たちが受け入れることをお釈迦様の教えは求めています。

桜井　晴美

『おばあちゃんになって！』

娘に子どもができたと聞いた時、何かわけもなく嬉しかった。月がたつにつれだんだん膨らんでくる娘のお腹をさすりながらただ無事に産まれてくることを願った。そして分娩室から元気な赤ん坊の声が響いてきた時ただただ感謝した。

ばんざーい！私はおばあちゃんになった。ばんざーい？おばあちゃん？

本当は「おばあちゃん」と呼ばれるのに何か違和感があった。抵抗があった。自分はまだ「おばあちゃん」と呼ばれるのは早すぎると感じていた。じゃあなんと・・・

私の友人はお孫さんに「〇〇ちゃん」と名前を呼ばせていることをうれしそうに話していた。ところが、お孫さんが年長さんのとき彼女が、幼稚園の参観日に出かけたところ、彼女の姿を探していたお孫さんが、見つけるやいなや大勢の保護者の人がきをかき分けて「〇〇ちゃーん」と大きな声で小さな手をこれでもかと振りながら走り寄ってきたときに、周囲の大人たちの失笑を受け、晴れやかなおももちだったお孫さんは一瞬にして地獄の淵に落とされたような暗く不安げな顔になり、そのあとの保育参観中いつもの活発さが見られなかったという。（強いショックを受けたのだろう。子どもにも自尊心はあるのだから）また、彼女自身も恥ずかしい思いをしたと同時に孫に悪いことをした・・・と話していたことを思い出した。

私は日ごろから正しい日本語を子孫に伝えていくのは、私たち大人の役目だと、機会あるごとに話していました。乳児だから幼児だからこそ初めて出会うことばは美しい日本語が望ましいと。そこでさっそく娘に言われました。「何悩んでいるの？お母さん。正しい日本語伝えていくんじゃないの？」

決まった！そう、わたしはおばあちゃん。

それから私は孫とかかわる時は自然にやさしい心で、声で、「おばあちゃんだよ」と話しかけていました。1歳半ごろになってだんだん語彙（ごい）も増えて、初めて孫の声で「（お）ばあちゃん」と聞いた時、その愛に満ちたやわらかなことばの響きを忘れません。

今年、二人目の孫が産まれました。それぞれの孫と私の関係は一つ一つ違うものです。それぞれの関係を大切にしながら『おばあちゃん』を楽しみたいし、孫が迷わず「大好き！」といえる素敵な「おばあちゃん」を目指したいと思います。

これからおばあちゃんになる方へ。孫が初めて口にする「おばあちゃん」という響きを想像してみてください。幸せな気持ちになりますよ。

おばあちゃん

ばんざい！

さくらい　はるみ
プロフィール
一九五三年生まれ
牡羊座O型
二〇〇六年三月、三十三年間勤務した幼稚園を退職
現在、「金沢おはなしの会」所属
野町小学校、泉中学校図書ボランティア活動中
モットー「くよくよするな。成るようになるものだ。とにかくチャレンジしよう！」

和讃（わさん）に学ぶ　第二十八回

常徳寺　西山　彰

無始流転の苦をすてて
無上涅槃を期すること
如来二種の回向の
恩徳まことに謝しがたし
（傍点筆者）

如来のはたらきによって救われましたという感謝の気持ちが述べられた和讃である。ここに出てくる「回向（えこう）」とは、如来のはたらきを意味している。

今でこそあまり聞きなれない回向という語であるが、古典落語にも出てくるぐらいだから、昔は一般に流布していたようである。広辞苑によれば、「仏事をいとなんで、死者の冥福を祈ること。」と出ている。

つまり回向とは、もともと衆生が他者に施すものであった。それを阿弥陀如来が我々衆生に向けて施すものであると解したのは、宗祖親鸞聖人の独自の見解であり、慧眼であった。

ではその回向とは、具体的にどういうことをさしているのだろうか。宗祖は、仏様の心が「南無阿弥陀仏」という名号のかたちをとって、私たちのところへ届くことであると解釈された。

その回向に二種類ある。「往相」と「還相」である。この「二種回向」は、真宗の根幹をなす教えであり、古来教学上の重要なテーマとなってきた。

十数年前、元大谷大学学長の寺川俊昭先生が、この「二種回向」について長年研究され、その成果を基にして発表された。その結論は極めて単純なものであった。

よき人（善智識）を通してお念仏が伝わってくることを「還相回向」、そのお念仏が衆生の中で深まっていくことを「往相回向」と言うのだと。

しかし、この「往」（ゆく）と「還」（かえる）という字がよくなかった。前者を浄土に「往く」こと、後者を浄土から「還る」ことと解する見解がいまだ根深くある。そしてそのように考える人たちによって、寺川先生の解釈は、一人の学者の一学説に過ぎないと断じられている残念な現状がある。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても
報ずべし
師主知識の恩徳も
骨を砕きても謝すべし

恩徳讃として知られている有名な和讃である。ここでは二種類の恩徳が述べられている。ここで先の和讃にもあった「恩徳」という言葉に注目したい。「回向」は、それを受ける衆生の側からすれば「恩徳」となる。つまりこのふたつの語は同義なのである。

ならば、あまりにも有名なこの和讃は、如来二種の回向を衆生の側からのべているということになろう。

謙虚に耳を澄ますならば、宗祖の言わんとされたことは明らかなのである。

ラジオ放送のご案内

徳法寺の杉谷淨です。四月から野々市町のFM局〈えふえむ・エヌ・ワン〉で番組を担当しています。毎月第一火曜日の午後一時三〇分から一時間、『生活いちばんシャトル便』という番組でパーソナリティをしていますので、お時間のある方はぜひお聴きください。周波数は76・3MHZです。インターネットでも聴くことができます。七月から十月までの放送予定日は次の通りです。ご意見等もお寄せ下さい。

七月七日
八月四日
九月一日
十月六日

同じ週の土曜日の午後八時から再放送もしています。

真宗人物伝　第十五回

周光寺　桐山信英

赤尾の道宗（どうしゅう）

五箇山・白川郷は、合掌造りの集落として世界文化遺産となっています。この五箇山の赤尾にある行徳寺（ぎょうとく）は、道宗さんと親しみを込めて呼ばれている方が開基とされています。その道宗は、室町時代の中期に活躍された篤信（とくしん）の念仏者であります。

道宗という名前は、蓮如上人からいただかれた法名です。幼名は弥七と言いました。言い伝えによりますと、弥七は四歳の時に母、十二歳で父と死別されました。父は遺言で父母に会いたいと思ったならば、九州の羅漢寺に行きなさいと。そうすれば、五百羅漢の中に親の顔に似た羅漢がきっといるからと。真面目な弥七は、二十歳の時、旅立ちを決心されますが、その道中において、ある念仏者の勧めにより蓮如上人を訪ねる縁を持たれたのであります。

弥七の人生は、蓮如上人との出遇いによって大きな転機を迎えました。九州の羅漢寺参りをやめて、蓮如上人のもとで聞法することにしたのです。熱心に聞法を続けられた弥七は、「道宗」という法名をつけてもらい念仏申す生活を始めたのでした。二十六歳のとき、自宅を聞法の道場としました。道宗は、月に一度は必ず越中井波の瑞泉寺に参られたと言われています。また年に二回か三回ははるばる山科御坊まで仏法聴聞に参られました。行徳寺には、四十八本の割れ木に横臥している道宗の像がありますが、四十八本は阿弥陀の四十八願に当たるとされ、痛みは慢心を許さない厳しさを物語るものであります。その姿は棟方志功（むなかたしこう）の版画に描かれています。また、真宗念仏者の指針として「二十一箇条の心得」を著わされました。第一条には、「後生の一大事、命あらん限り、油断あるまじき事」と述べられています。第二条には、「仏法よりほかに心にふかく入る事は、あさましく存じ候いて、すなわち、ひるがえすべきこと」と述べられています。

真宗豆知識

如来のあたま

阿弥陀如来をはじめ、釈迦如来、大日如来など、如来には明らかに他の人とは違う三十二の特徴があります。これを三十二相といいます。その中でも今回はあたまについて見てみましょう。

まず、一見してわかるのは、頭の上がお団子を乗せたように盛り上がっていることです。髪の毛を結っているように見えなくもありませんが、これは肉が盛り上がっているのです。如来になるための修行をしている菩薩にはこの肉はありません。ほとんどの菩薩は髪を長く伸ばし頭の上で結っているので同じように見えるかもしれませんが違うのです。ちなみに今話題の興福寺の阿修羅像も頭の上が盛り上がっていますが、これも長い髪を結っているのです。

次に、一本一本の髪の毛が右回りに渦を巻いていることです。パンチパーマを当てているように見えるのはこのためです。ですからあのクルクルを延ばすとものすごく長くなるのです。

次は少し分かりにくいのですが、額が平らであることです。

最後は、その額にあるボタンのようなものです。フウテンの寅さんでお馴染みの渥美清さんにはここにほくろがありましたが、如来のはほくろでもいぼでもありません。これは白くて柔らかな長い毛が額から生えていて、右回りにクルクルとまとまっているものです。

そんな人は見たことないと思われるかもしれませんが、お経にそう書いてあるからしかたありません。そうそうあちこちに如来様がいるのもどうかと思いますから、そのぐらいでいいのかもしれません。一度阿弥陀さまの頭をゆっくりとご覧になってみてください。

（浄）

「御絵伝」でたどる親鸞聖人のご生涯（11）

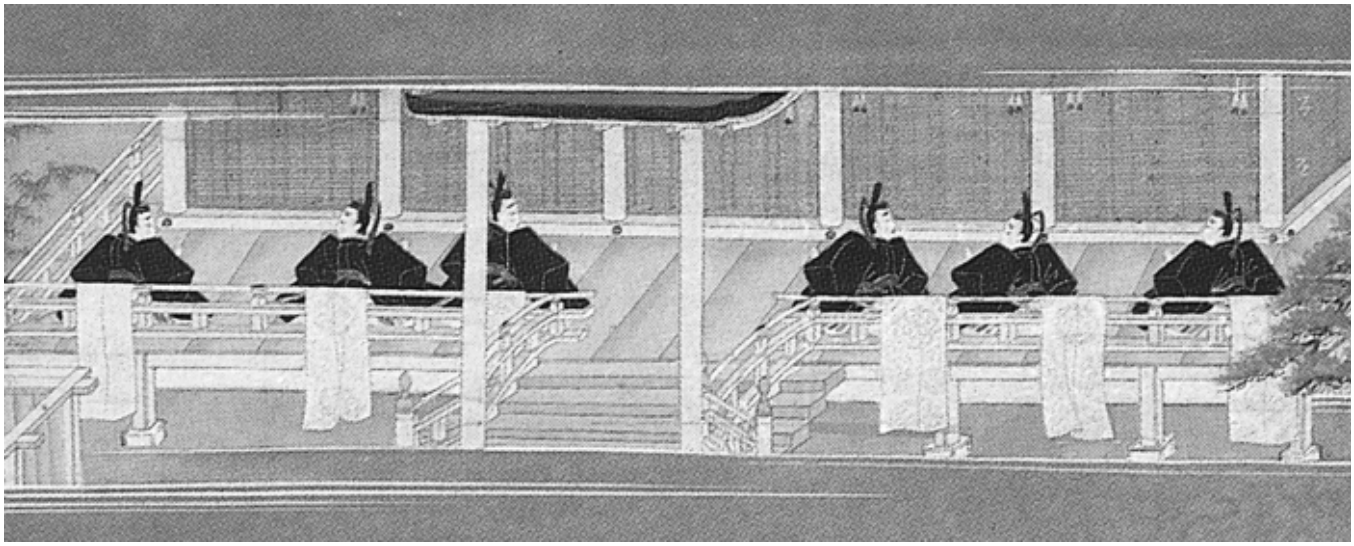
法然上人は、「南無阿弥陀仏」とただ念仏を称えることで浄土へ往生できる、と教えられました。この浄土宗の教えは、日本の仏教史上まったく革新的なものでした。なぜなら、厳しい修行を積み重ねることで仏のおさとりが得られる、と理解するのが仏教であると考えられていたからです。念仏往生の教えは、行や善根功徳の積めないものであっても、いつでもどこでも実践できるものでありました。法然上人に対する旧仏教側は、私たち人間が菩提心のかけらも起こさずに仏のさとりが開かれる、という教義は異端邪執の思想であると受けとめたのでした。

吉水の地で初めて法然上人にお会いした親鸞聖人は、そのときの出遇いを『歎異抄』の中で「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて信ずるほかに別の子細なし」と言い切られました。親鸞聖人は、法然上人の勧められた念仏の意義を、誤ることなく受けとめられ、念仏の法は仏の教えであると信ずることができたのです。

しかし、奈良や比叡山の優れた学僧たちは、法然上人のお心がわからず自分たちが属する聖道門の教えがすたれてきたのは法然上人のせいだと考えました。そして吉水の教団をすみやかに処罰するべきだと朝廷に訴えを起こしました。その経緯は前回紹介いたしました。そのことを親鸞聖人は、『教行信証』「化身土巻」に書いておられます。「聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛なり。しかるに、諸寺の釈門、教に昏くして、真仮の門戸を知らず。洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁うることなし」と。「諸寺の釈門」は仏の教えに暗く、何が真実で何が方便であるかを知らないのである、と述べられます。また、朝廷に仕えている「洛都の儒林」も、行に迷って正しい教えとそうでない教えの区別を弁えていない、と述べられます。このようなわけで、承元元年（一二〇七年）興福寺の学僧たちは、後鳥羽上皇・土御門天皇の時代、朝廷に専修念仏の禁止を訴えたのでありました。

下の図は、京都御所の仁寿殿で公卿が集まり、法然上人以下十二名の行状について僉議が行なわれている場面であります。法然上人（罪名、藤井元彦）は土佐国に、親鸞聖人（罪名、藤井善信）は越後国に流罪となりました。

（信英）



本の紹介

「悩む力」

姜　尚中　著
集英社新書

姜尚中という名前は知らなくとも、また「カン・サンジュン」と読めなくとも、この人の顔をご存知の方は多いだろう。ニュース番組でのコメンテーターとして、最近ではＮＨＫの「日曜美術館」の司会者としても活躍中の東大教授である。

ここで紹介させていただく「悩む力」は、題名はやや重いが、全体的に軽い語り口で読みやすい内容だった。

「悩む」ということには、マイナスイメージがつきまとう。しかしこの「悩む力」こそ人間特有のものであり、それが人間を成長させると氏は言うのだ。つまり、悩むということを肯定的に論じた珍しい本なのである。

氏のユニークな考えのひとつを紹介してみたい。

社会の高齢化が進み、やがて四人に一人が六十五歳以上になる。それにつれて文化の担い手が若者から高齢者へと移行し、文化そのものが質的に大きく変化を遂げる。

これまでの日本では、「若さ」ということが何の疑いもなく尊いとされてきた。それは裏を返せば、若さの対極にある「老い」とか「死」を片隅に追いやる社会であり文化であった。

それに対し、高齢者のつくる文化は、「死とともにある文化」「死を受け入れた文化」である。それは同時に何者をも恐れない生き方を可能にする文化でもある。

とまあこんな感じである。なかなか鋭い視点だなと思える部分と、少し首を傾げてしまう部分が交錯する。しかし押し付けがましく結論を語ることもなく、読んでいてさわやかな印象さえ感じる。

真宗の僧侶が「生のみがわれらにあらず、死もまたわれらなり」などとしかめっ面して言っていることを、さらりと言ってのけていて爽快である。

おそらくそれは、氏自身が「悩んでいる姿」を気取ることなく披露しているからに違いない。

私たちは、何事につけても結論ばかりを追い求め、自分の頭で考えることから遠ざかろうとしてはいないだろうか。この本を読んで、大いに悩もうではないか、と思った。（彰）

各寺のご案内

◆常　徳　寺

金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

◎報恩講
十月十日（土）
午前十時よりお逮夜
午後一時半よりお日中

◆徳　法　寺

金沢市野町
二丁目三二―四
TEL二四一―五二一九

◎お　講
毎月二十一日
午後七時半より
講師
七　月　杉谷　淨
八　月　表　美智子
九　月　杉谷　淨
十　月　幸村　明
十一月　杉谷　淨
十二月　荒木　範夫

◎秋彼岸絵画展
九月二十日（日）より
二十六日（土）まで
富田美江子

◎秋彼岸中日及び永代経
法要
九月二十三日（水）
午後二時より
講師　藤原千佳子

◆周　光　寺

金沢市中村町
二十一番一号
TEL二四二―二七一四

編集後記

今年は梅雨入りしてから雨が少ないようです。心なしか紫陽花も雨を待っているように見えます。

実はいろいろ悩んだ末、今号をもって編集の仕事を降りることにしました。これまで数多くの読者の方々に励まされながら、続けてきました。「いつも読んでいますよ」と嬉しそうに話されるおばあさんの顔を思い出します。

編集会議における西山さんと杉谷さんの真剣な対話を通して、真宗を学ぶ上で視野を広く持つことの大切さを教えられました。

このたび、私の勝手な思いを聞き入れていただき、慚愧に堪えません。本当にありがとうございました。（信英）

編集委員
西山　彰（常徳寺）
杉谷　淨（徳法寺）
桐山　信英（周光寺）